

青年期女子の性役割に関する研究 — 属性・キャリアパターンとの関連 —

日下 知子¹, 亀和田 梓², 立石 理奈³
寺岡 美幸⁴, 中山あゆみ⁵, 藤井今日子⁶
桃谷早野花⁷

A Study of Gender-Role in Female High School Students

— The Relationship Between Gender-Role Attitude, Attribute and Career-Pattern —

Tomoko KUSAKA¹, Azusa KAMEWADA², Rina TATEISHI³,
Miyuki TERAOKA⁴, Ayumi NAKAYAMA⁵, Kyouko FUJII⁶
and Sayaka MOMOTANI⁷

キーワード：性役割態度，属性，キャリアパターン

概 要

本研究では，青年期にある女子高校生の性役割に対する考えを平等主義的性役割態度の概念で捉え，属性およびキャリアパターンとの関連を明らかにした。公立高等学校に在学する女子高校生799名に対し，属性に関する項目，就業継続意志を示すキャリアパターン，平等主義的性役割態度からなるアンケート調査を実施した。その結果，学年では一年生よりも三年生の方が，所属科では普通科よりも専門科に所属している学生の方が性役割態度において平等主義的な傾向を示した。また，将来希望するキャリアパターンをもち，なおかつ仕事主導型を希望する学生は家事・育児主導型を希望する学生よりも平等主義的性役割態度得点が高かった。この結果から学年の進級，専門学科への所属，希望するキャリアパターンが男女の性役割に対する意識に関連することを考慮した上で，将来に向けての自立への援助とアイデンティティの確立への教育的関わりの必要性が示唆された。

1. 緒 言

人間は男，あるいは女としての生まれたときから自分の性に応じた行動，態度をとることを期待されている。男性が男性性を，女性が女性性を身につけるのは自然の成り行きであり，それも人間にとって生物学的な現象とみなされがちである。しかし，それぞれの性役割を獲得したり，確立させたりしていくことは，様々な心理的・文化的・歴史的次元における様々な要因と

結びついた，きわめて複雑な事象である¹⁾といえ，人生のいくつもの発達段階や局面を経ながら，経験と学習を通して，形成・確立されていくものである。

特に，女子青年期では，社会的に認められた大人として，それぞれの性に応じた社会的役割を理解し，学ぶといった段階²⁾において，自己が望む役割と社会から女性に期待される役割の間に不一致を感じており，女子青年には性役割葛藤が存在する³⁾といわれる。このことは，近年での女性の就労の増加や就労範囲の拡大に伴い，女性の社会的地位が変化してきており，男女の役割における多様な価値観によって影響を受けているといえよう。

性役割とは，それぞれの性にふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動である⁴⁾。先行研究では，1970年代より性差および女性の性役割研究を中心に幅広い分野での報告があり⁵⁻⁷⁾，今なお，その概念の分類は統一されておらず，研究者によって異なっている。その

(平成16年10月4日受理)

¹⁾川崎医療短期大学 第二看護科，²⁾原眼科病院，³⁾公立八女総合病院，
⁴⁾井原市民病院，⁵⁾京丹後市立久美浜病院，⁶⁾国立病院岡山医療センター，
⁷⁾日本医科大学付属病院

¹⁾The Second Department of Nursing Kawasaki College of Allied Health Professions

²⁾Hara Ophthalmology Hospital

³⁾Public Yame General Hospital

⁴⁾Ibara City Hospital

⁵⁾Kyoutango City Kumihama Hospital

⁶⁾National Hospital Organization Okayama Medical Center

⁷⁾Nihon Medical University Hospital

中から、本研究においては、性役割に対する認識として、性別役割分業に対する態度という点でどのような傾向を持っているのかを示す性役割態度の概念を取り上げ、従来から相関関係があるとされる属性および将来の就労継続の意思を示すキャリアパターンとの関連を検証することを目的とする。

2. 研究方法

1) 対象者

O県下の公立高等学校1校を対象校として選定し、高校生984名を調査対象とした。回収された計924名(回収率93.9%)のうち、調査データに欠損値のあるもの(162名)、男子学生(23名)を除く799名(有効回答率81.2%)を分析対象とした。

2) 調査と時期

(1) 調査期間

2003年11月28日～12月2日

(2) 調査方法

学校長の許可を得て、学校を通じて調査票を配布し、対象者は調査票に記入後、調査票配布時に渡した封筒に封をする留め置き法によって実施した。

(3) 倫理的配慮

対象者に対して、調査内容は無記名で統計的に扱い、個人が限定されるものではないこと、また対象者のプライバシーに関するもののため、研究目的以外に使用しないことを依頼文に記載し、協力を求めた。

(4) 質問紙の構成内容

質問は属性として、学年(年齢)、性別、所属科、アルバイト経験の有無と内容およびその理由を、就労継続意思を示す将来希望するキャリアパターン、男女の性役割に対する考えとして平等主義的性役割態度尺度から構成されている。

① 将来希望するキャリアパターン

将来において、卒業後どの程度まで就労を継続しようと考えているかについて、宇井ら⁸⁾の作成した単一回答形式で選択肢は、a) 学校を卒業したら仕事に就きたくない、b) 結婚するまで仕事をし、結婚後は仕事を辞めて家庭で家事や育児をしたい、c) 結婚しても仕事を続けるが子どもが生まれたら仕事を辞めたい、d) 子どもが生まれたら仕事を辞めるが子どもが大きくなったら再び仕事をしたい、e) 結婚しても子どもが生まれても仕事を続けたいであった。

② 平等主義的性役割態度尺度

高校生の平等主義的性役割態度について測定するた

めに、鈴木⁹⁾の開発した次元尺度である平等主義的性役割態度スケール(the Scale of the Egalitarian Sex Role Attitude: SESRA)の短縮版尺度(以降SESRA-Sと略す)を用いた。ここでの平等主義は、「それぞれ個人として男女の平等を信じること」であり、性役割態度は、「性役割に対して一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向」とそれぞれ定義されており、鈴木⁹⁾によって本尺度は性役割に対する平等意識を問うものとして15項目から構成されている。「全くその通りだと思う」から「全然そう思わない」までの5件法で測定し、単純加算得点が高いほど性役割に対して平等主義的であり、低いほど伝統主義的であることを表している。この尺度のクロンバック α 係数は、鈴木⁹⁾の研究報告では $\alpha = .91$ (男性 $\alpha = .89$ ・女性 $\alpha = .91$)であった。

(5) 分析方法

分析は、統計学パッケージSPSS 11.5J for Windowsを用いた。各変数間の相関分析には、Pearsonの関数相関係数を用い、平均値の差の検定には2群間で対応のないt検定を、3群間以上では一元配置の分散分析を行った。

3. 研究結果

1) 調査対象の属性

分析対象に関する属性は、表1に示す。全学年の平均年齢は16.70歳(SD.95)であり、所属科では専門科に所属する者の割合が全体の42.7%であった。アルバイト経験の有無では、アルバイト経験のある者が全体の25.2%であった。対象者の学年別内訳では、一年生262名、二年生253名、三年生284名と学年毎にほぼ同数

表1 分析対象の属性 (N=799)

	M	SD
平均年齢	16.7	0.95
	N	(%)
学年/一年生	262	(32.8)
二年生	253	(31.7)
三年生	284	(35.5)
所属科/普通科	457	(57.2)
専門学科	342	(42.7)
看護	144	(18.0)
家政	97	(12.1)
福祉	101	(12.6)
アルバイト経験あり	202	(25.2)
なし	597	(74.8)

注 M: 平均, SD: 標準偏差, N: 人数

であった。

2) 調査対象の将来希望するキャリアパターン

分析対象の将来希望するキャリアパターンは、a) 学校を卒業したら仕事に就きたくない11人(1.4%)、b) 結婚するまで仕事をし、結婚後は仕事を辞めて家庭で家事や育児をしたい83人(10.4%)、c) 結婚しても仕事を続けるが子どもが生まれたら仕事を辞めたい83人(10.4%)、d) 子どもが生まれたら仕事を辞めるが子どもが大きくなったら再び仕事をしたい319人(39.9%)、e) 結婚しても子どもが生まれても仕事を続けたい303人(37.9%)であった。全対象者の77.8パーセントが子どもを持ち、仕事をするに肯定的な考えをもっていることが示された。

3) SESRA の平均、標準偏差、信頼性係数

尺度は range 15-75, M=58.15 (SD 7.30), 信頼性係数 α は .62 であり、使用した尺度は適当な内的整合性を備えていると判断できる。

4) 平等主義的性役割態度と属性との関連

女子高校生の平等主義的性役割態度が属性とどのように関連しているかを検討するために、属性毎に SESRA-S 得点の平均値の差について t 検定を行った。その結果を表 2 に示す。学年別では、一年生より

表 2 水準別属性毎の女子高校生の平等主義的性役割態度の平均値、標準偏差および t 検定結果 (N=799)

	N	M	SD
学年	一年生 262		7.45
	二年生 253	$t = -.10$ $t = -1.63$	7.45
	三年生 284		6.99
所属科	普通科 457	57.75	7.16
	専門学科 342	58.68	7.47
		$t = 1.79^+$	
アルバイト	あり 202	58.44	7.13
	なし 597	58.05	7.36
		$t = .66$	

注 M: 平均, SD: 標準偏差, N: 人数, + $p < .1$

も三年生の方が SESRA-S 得点の高い傾向が示された ($t(797) = 1.76, p < .1$)。学科別では、専門学科に所属している者の方が普通科に所属する者よりも SESRA-S 得点の高い傾向が示された ($t(797) = 1.79, p < .1$)。アルバイト経験の有無では、有意差は認めなかった。

5) 平等主義的性役割態度とキャリアパターンとの関連

女子高校生の平等主義的性役割態度が、将来希望するキャリアパターンとどのように関連しているのかを検討するために、一元配置の分散分析を行った。その結果、平均値の差を認めたため ($F(4,792) = 25.9, p < .01$)、続いてキャリアパターン選択肢の「a) 学校を卒業したら仕事に就きたくない」に答えた者11名(1.3%)を除く、b~eを選択した788名をbとc群およびdとe群に二分し、それぞれを家事・育児主導型、仕事主導型として分類し、t検定を行ったところ、平均値の差を認めた ($t = -6.83, p < .01$)。その結果を表 3 に示す。

4. 考 察

初めに、本研究における分析対象に関する属性について考察すると、性別では全生徒数に占める女子割合が96.6%と非常に高く、学科別に見ても専門科に所属する割合が42.7%であり、全国平均で見た高等学校本科における学科別生徒割合27.0%¹⁰⁾をはるかに超えている。このことは対象校が看護科、家政科、福祉科といった4専門学科を設置していることを反映しているものと考えられる。よって、本研究における分析対象は、全国平均よりも、専門学科における特色が強いといえる。

1) 属性と平等主義的性役割態度との関連

最初に、属性それぞれと平等主義的性役割態度との関連において考察する。今回の調査で得られたt検定の結果、一年生よりも三年生の方が性役割態度において平等主義的な傾向であることが示された。つまり、

表 3 キャリアパターンを分類した女子高校生の平等主義的性役割態度尺度の平均値、標準偏差および t 検定結果 (N=799)

項 目 内 容	N	分類	M	SD
a. 学校に卒業したら仕事につきたくない	11			
b. 結婚するまで仕事をし、結婚後は仕事を辞めて、家庭で家事や育児をしたい	83	家事・育児主導型	54.80	7.12
c. 結婚しても仕事を続けるが、子どもが生まれたら仕事を辞めたい	83			
d. 子どもが生まれたら仕事を辞めるが、子どもが大きくなったら再び仕事をしたい	319	仕事主導型	59.04	7.08
e. 結婚しても、子供が生まれても、仕事を続けたい	303			
			$t = -6.83^{**}$	

注 M: 平均, SD: 標準偏差, N: 人数, ** $p < .01$

学年が上がることで学習レベルが高くなることに加え、社会からの様々な刺激を受けることで、社会への関心の高まりと自らの進路希望が現実化してくるによって、自己実現の過程として男女平等意識が強まってくることが考えられる。学年が上がるに連れ、女子青年は平等的性役割態度を有するようになるということについては多くの報告が見られる^{8,11)}。

学科別では、専門学科に所属するものの方が普通科に所属する者よりも性役割態度において平等主義的であることが示された。このことは、専門学科での学習が普通科での学習に比べ、より専門的であるといえ、将来の職業としてのイメージが早期に形成されることが考えられる。また、同じ目的意識をもつクラスの友人や周囲からの社会的雰囲気によっても相乗的な影響を受けているといえるだろう。それは、就労意欲にも繋がり、女性としての伝統的性役割観にとらわれない生き方や、男女が平等に社会進出すべきだという社会的活躍規範をもつことになると考えられる。就労意欲が高い高校生は、平等的性役割態度を有することは中野区・婦人担当問題においても報告されている¹²⁾。

2) キャリアパターンと平等主義的性役割態度との関連

次に、将来の自分自身について、女性としてライフサイクルのどの程度まで仕事を継続しようと考えているかどうかということと平等主義的性役割態度との関連において考察する。今回の調査で得られた集計結果では、77.8%の者が子どもをもち、仕事をすることに肯定的であり、このことは、母親世代の女性の労働力率の高さ¹³⁾を見ても、働く母親のもとで育った可能性が高く、その姿をあたりまえとして捉えているといえる。つまり、女性の先輩としての母親の姿を無意識のうちに価値づけており、自らのキャリアパターンにおいても同様に選択していることが考えられる。

分析の結果、キャリアパターンと平等主義的性役割態度との関係が明らかになり、将来を仕事主導型で考えている者は、家事・育児主導型で考えている者よりも、性役割態度において平等主義的であることが示された。つまり、将来、結婚・出産にかかわらず仕事を続けようと考えている女子高校生は、男女の平等的な性役割態度に対して肯定的であるといえる。すなわち、働き続けたいと考える女子高校生は、働くことだけでなく家事・育児においても役割分業意識が強いことが考えられる。結婚しても出産しても仕事を続ける意識をもつ女性は、平等志向性のレベルが高いという報告¹²⁾

においても支持されている。一方では、女子高校生の平等主義的性役割態度は、家事の分担や自分自身の自立などの自己に関連する範囲内に限定されている⁹⁾という報告もあり、平等に関する意識はこの範囲内で成立していると捉えることもできる。

今回の対象は、青年期中期にある女子高校生であり、青年前期からこの時期にかけてが、最も異性への関心が高まり、男女の差異に敏感になるため、性にかかわる認知的枠組みが活性化される時期といえる¹⁴⁾。また、身体発達においてもピークを迎え、ある程度自己が確立して周囲の環境を客観的に見ることができるようになるといえ、女子高校生達が性役割に対するアイデンティティを確立していけるためには、自己の範囲を超え、社会での女性全体の問題として視野を拡げていけるような教育的かかわりが求められよう。

5. 本研究における限界と今後の課題

本研究における課題として、以下に述べる。

第一に、調査対象校が一高校に限定しており、また女子在籍比率が高いことから、専門学科設置校としての特色が強かったと思われることである。今後は、対象校を一般の男女共学の観点からも増やすことと、女子学生だけでなく男子学生のおかれた属性や就業意識との比較関連を検討していく必要がある。

第二に、本研究では青年期女子を高校生のみ限定したが、発達変化過程を捉えようとする観点からは、青年期全般を視野に入れた中学生、大学生を対象とした各時期との比較や縦断研究が必要である。

6. 結 論

- 1) 女子高校生の性役割態度において、学年別では一年生よりも三年生の方が、所属科では専門学科に所属していることが普通科に所属することよりも平等的な傾向が認められた。
- 2) 女子高校生の平等的な性役割態度は、将来、希望するキャリアパターンに関連しており、家事や育児を主導的に考えるよりも、仕事を主導的に考えることと関係していた。

謝 辞

本調査研究にあたり、御協力いただきました高等学校の学生・教職員の皆様方に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 古屋健治, 星野 命, 山田良一編著: 青年期カウンセリング入門, 青年期の危機と発達課題, 東京: 川島書店232, 1998.
- 2) R.J. ハビィガースト 荘司雅子監訳: 人間の発達課題と教育, 122—130, 玉川大学出版部, 東京, 1995.
- 3) 伊藤裕子, 秋津慶子: 青年期における性役割観および性役割期待の認知, 教育心理学研究, 31, 146—151.
- 4) 東清和, 鈴木純子: 性役割態度研究の展望, 心理学研究, 62(4), 270—276, 1991.
- 5) Bem, S.L.: The measurement of psychological androgyny, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155—162, 1974.
- 6) 柏木恵子: 青年期における性役割の認知II, 教育心理学研究, 20(1), 48—58, 1972.
- 7) 柏木恵子: 青年期における性役割の認知III, 教育心理学研究, 20(1), 1—11, 1974.
- 8) 宇井美代子, 松井 豊他: 女子高校生における性役割態度の変化過程, 心理学研究, 72(2), 95—103, 2001.
- 9) 鈴木淳子: 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成, 心理学研究, 65, 34—41.
- 10) 文部科学省: 平成15年度学校基本調査, 2004-08-15. <http://www.mext.go.jp/b.menu/toukei/001/04011501/001.htm>
- 11) 松尾祐作: 青年の結婚観と性役割意識—高校生と大学生の比較を通して—, 福岡教育大学紀要, 42, 321—326.
- 12) 中野区・婦人担当問題: 高校生の性別役割分業に関する意識と実態, 1982.
- 13) 厚生労働省: 女性労働白書 平成15年度働く女性の実情, 2004-08-15. <http://www.mblw.go.jp/wp/hatarakusyo/>
- 14) 伊藤裕子: 高校生における性差観の形成環境と性役割選択, 教育心理学研究, 45(4), 30—38.

